

いの流水俳壇

「当季雑詠」

刈谷 志津 選

特選

風薫る庭のかたえに地魚干す

渡邊ゆかり

〔評〕「風薫る」は、初夏に青葉の香りを吹き送る風の事で、「薫風」とも言う。その新鮮な風が過る中七「庭のかたえに」は、庭の片方の日当たりの良い方で、下五「地魚干す」の地魚は、当地にいる魚のこと。あえて魚名は記されていないが、「干す」の措辞より作者が干したもので、特に黒潮の海よりの高知の地魚は鮮度も良く、美味しいことは言うまでもない。初夏の涼やかな風の中に干され、青葉若葉の香も入れて、さぞ風味豊かな干魚に仕上がったであろう。干魚に風薫るといふ的確な季語の効果により、平穩な暮らしの一端を垣間見せ、味わい深い一句。

青き空同じ高さに葱坊主

津田 久美

〔評〕葱坊主とは葱の花の事で、茎の頂に無数の白い小花が集まって球状となる。その様を坊主頭に見立てて言う。春になると葱坊主が中七「同じ高さ」に、ほぼ丈も揃えて出揃うと、今までのイメージが一変する。この可憐な呼名は俳界では、擬人化して詠まれる句が数多ある。ちなみに「泊まることにしてふる里の葱坊主」この句は、葱坊主を人に喩えて詠んだ、漂泊の俳人として有名な種田山頭火の一句。揚句は「同じ高さ」に焦点を絞って作句したことにより、葱坊主の賑わい、畑の広さも見え、青空と葱坊主の照応もよく、平明で情景が眼前に広がる。

新緑に広間の畳染まるほど

村田佐代湖

〔評〕初夏となり、目の覚めるような若葉の緑を新緑と言う。この新緑の中にある広間とは、佐川町の有名な牧野公園に隣接した由緒ある古刹「青源寺」。寺には、座禅を行うため開け放たれた広々とした和室がある。三方を小高い山に囲まれ、四季折々の豊かな自然の景に恵まれ、ゆとりある厳肅な寺。わけても五月の美しい新緑が、

薫風に乗る吹き込み、そこに敷かれた畳までが青々と染められて行くと、作者の繊細な感性と俳眼で詠み上げた佳句。また佐川町は、私の生まれ育った故郷。数十年前の一日、句会もさせてもらった青源寺。懐かしい思い出に出合い、感動にひたる作品。

入選

地蔵像全き慈顔春満ちる

語らへば皆んない人風かおる

好物に茄子の浅漬け亡父偲ぶ

竹林が棚田となりて夏来る

山揺すり一家総出の茶摘かな

二句抄

遠来の人も鯉のひろめ市

庭古木生きた証しの若葉かな

ブラジャーもシャツも意のまま青嵐

考える鴉へ散りかかる桜

茶摘みする腰付籠を洗いおく

欠席の葉書ポストに五月雨

山里のぼつりと泳ぐ鯉幟

十連休旅することなく春惜しむ

明日雨になるらし春のうろこ雲

石垣にサボテン蓄む郷の道

新緑の匂ふ山道踏みしめて

琴の音も雨に濡れいし余花の里

万緑の中に一点白い雲

鯉幟に我に続けと空を舞う

藤房の揺れて隣はいつも留守

何時迄も部屋の中真中に春炬燵

令和の和永久に平和を子供の日

降り暮れて田の闇深む遠蛙

岡村 嘉夫

東谷 晴男

川村 博子

森岡 照月

片岡 豊子

岡村 嘉夫

東谷 晴男

川村 博子

森岡 照月

片岡 豊子

村田佐代湖

渡邊ゆかり

津田 久美

刈谷 志津

次題「当季雑詠」

締切／毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

8933-1922

今月のこども川柳

朝見ると 金魚の命 生まれてた

枝川小 4年 中村 栞理

【評】「あかちゃん」または「子ども」と詠むところを「金魚の命」と詠んでいる言葉の素晴らしい点を評価しました。

やっとです 六年生に なりました

伊野小 6年 川崎 あお

【評】やっとです…に、懸命に努力した素直な気持ちが現れていて、好感を抱きました。

新学期 つくしのように のびたいな

伊野小 6年 塩田 泰万

いっしゅんで 消えてゆくのは にじの橋

枝川小 4年 細木 初乃

春がきた はじめのいっぱい すすもうよ

伊野小 4年 谷脇 梨真

こいのぼり 三びきそろって 家ぞくかな

伊野小 3年 橋本 純和

雨ふって よろこぶカエル かわいいな

枝川小 5年 武内 梢真

おてつだい いろいろしたよ やすみのひ

枝川小 3年 山崎咲空良

五年生 あたらしいへや うれしいな

川内小 5年 横畠 圭音

先生が だれになるのか 知りたいな

長沢小 4年 山中 実優

「こども川柳」は町内全小中学校の児童のみなさん対象に募集しています。次回提出締め切りは7月10日(水)です。たくさんみなさんの応募をお待ちしています。(応募は各小中学校を通じてお願いします。)

※選評は、川柳連会のみなさんをお願いしています。